昭和51年5月18日（火）　時事解説　第3種郵便物認可

●外交時評

「天安門事変」以後

中嶋嶺雄（東京外国語大学助教授）

中国の清明節に起こった「天安門事変」以来ちょうど一カ月が過ぎた。天安門前広場という毛沢東中国の〝聖地〟で起こった数万～数十万の規模の〝大衆反乱〟であっただけに、この未ぞうの事件が党中央に与えた衝撃には、計り知れないものがあったといえよう。

◇――

この事件を即座に「反革命事件」と断じた党中央は、現行憲法および党規約上の所定の手続きも経ずに、事件二日後、鄧小平副首相のあらゆる職務を解任し、現行党規約にもその規定のない「党第一副主席」というポストを明示して新首相の華国鋒をその地位につけたのだが、こうした経緯のなかにも、衝撃の大きさが反映していた。

党中央の決定が出てから、それを支持する官製デモや各級各分野の決議も出そろったけれども、やはり一種の〝しらけ〟ムードは否めないであろう。去る五月一日のメーデーには、華国鋒新首相とともに江青夫人が主役を演じて、一連の事態の背後にある彼女の存在をいやがうえにも浮かび上がらせたが、こうなると、いよいよ〝しらけ〟てくるのではなかろうか。

それというのも、今回の「天安門事変」の最大のポイントが、文革派への痛烈な批判、とくに江青夫人に対する批判が目立ったことだからである。

『人民日報』は「反動的文人」の仕業だといっているが、あらゆる形式の内容豊かな詩が達筆の鮮やかな文字ではんらんし、それらはことごとく江青批判、姚文元批判だったことを現場にいた何人かの信頼すべき筋は確認している。「江流」とか「妖風」とかの言葉が、それらの詩のなかにはひん出していたのであった。

さらに『人民日報』は、事件を「鄧小平擁護の陰謀」であり、「毛主席にたてつく反革命策動」だったとしているが、鄧小平擁護のスローガンはほとんど目立たず、もっぱら亡き周恩来首相への哀悼と追慕の情の噴出であったのが真実だという。

つまり、問題の核心は、江青、姚文元ら文革派への不満であり、とくに文革派が周恩来首相の死を悼まないばかりか、「走資派」批判にかこつけて、周恩来批判をも敢行しかねない雲行きだったことに対する大衆の反発なのである。したがってより広い文脈では、今回の事件の基本的性格は〝反文化大革命〟だったのである。

ところが党中央は、この事件をもって鄧小平失脚への決定打となし、同時に江青・姚文元対周恩来という事件の基本構図を書き換え、論点をすりかえて処断してしまった。ここに大衆の新しい不満が潜在しつつあるように思われる。このような状況のもとでは、すでに「走資派」批判の本質を知りつくし、ついに悔い改めなかった鄧小平のしぶとい政治的個性をまのあたりにした中国民衆は、なかなか説得されないのではないか。

◇――

去る四月二十九日に起こったソ連大使館爆破事件は、このような「天安門事変」以後の状況のなかでしか起こり得ない事件であるような気がする。

中国当局はこの事件にかんしても、「これは反革命分子の破壊活動によるものである」（北京四月三十日発ロイター電）旨を述べている。しかし中国ほどの「革命国家」において、それほどまでに「反革命分子」が存在するのだとしたら、ではいったい、毛沢東政治とはなんなのか――が、いままさに改めて問われなければならないであろう。